

# 「建ててよかった」20年前の約束



文化センター創設委員／町民フェスタ実行委員長

京川 誠 さん

みの〜れと共に生活するスタイル  
**Minole Life**  
**のすすめ** No.177

梅雨に入り、色鮮やかな紫陽花が似合う季節になりました。紫陽花の花言葉は『家族団らん』。小さな花がひしめき合って咲く姿が由来の一つになっているそうです。雨が続き青空が恋しい時期でもありませんね。みの〜れは11月3日、20歳の誕生日を迎えます。文化センター創設委員、町民フェスタ実行委員長など、みの〜れ誕生に尽力された、小美玉市西郷地にお住まいの京川誠さん取材します。

## 誕生に尽力 今では誇り

京川さんは京都府の丹後で生まれ育ちました。「小さい頃から夢は、絵描きや漫画家、イラストレーターでした。20歳の時に美術部のときの先輩から声がかかり、上京してアルバイトをしながら漫画家のアシスタントをしていました。妻とはその頃に東京で出会いましたが、妻の叔母が暮らす美野里町にはじめて来たとき、ここは終の住処だと思ったくらい素敵な町でしたね」。

みの〜れ誕生が近づき、文化情報紙「みのリズム」の中に「みのんぱ」という妖精のイラストを誕生させました。「みのんぱは、普段は森の中に住んでいる妖精で、みの〜れで楽しそうなのがある」と森の中から出てくるんです。誕生から20年経って、森の中には子孫もたくさんいると思いますよ」と笑顔。

また、京川さんは里親としてファミリーホームを運営しています。「茨城に来なかつたら里親はやっていなかつたと思います。市役所で『あなたも里親になりませんか?』という県の広報紙が目にとまったのがきっかけです。今でも子どもたちが通う幼稚園や学校のPTAにも関わっているのです。毎日忙しく暮らしています。絵は子どもたちと打ち解け合うための大切なコミュニケーションツールです。東京に出てきたのも、妻と知り合えたのも、おばあちゃん

の田舎に来たのも、全て繋がっていたんだと思います」と京川

さん。「文化センター建設の町民アンケートを私たち委員が手分けして回収していた時、あるお宅で『何の役に立つのか。文化センターはいらない』と言われしました。その時、私は『10年20年後に建ててよかったと必ず思いますから』と約束しました。そして今、こんなにもたくさんの人たちが想いを寄せてみの〜れを育み、共に成長しています。全国から称えられるみの〜れの姿は小美玉市の宝であり、市民の誇りです。心の底から『建ててよかった』と思える結果が出ていますね」と声を弾ませて語ってくれました。

1996(平成8年)、京川さんは、旧美野里町で文化センター構想の検討会議に参加されました。「みの〜れを建てることができたのも、関わった人々やタイミングに恵まれ、そして外から来た人のことも温かく見守ってくれる美野里町の風土、それらがあつたからこそだと思います」と振り返ります。

20年前には小さかった木が、みの〜れをすっぽり包み込むように大きく育ちました。木陰からは小鳥のさえずりや、葉っぱのささやきが聞え、まるで避暑地にいるような気持ちになります。ぜひ、遊びに来てください。

(藤田佐知子)